【実践報告】

続くコロナ禍における学生の課外活動支援

「学生支援プロジェクト事業」の実施を振り返って

白村 直也
岐阜大学教育推進・学生支援機構

要旨

本稿は令和３年度　岐阜大学教育推進・学生支援機構学生支援センター主催「令和３年度基盤的能力を育成する学生支援プロジェクト事業」実施に関する実践報告を記すものである。令和２年度からの新型コロナウィルスの感染拡大が大きな社会問題となる中，感染防止に最大限注意を払いながら，学内募集，中間発表会，そして最終発表会を通じて学生の課外活動を支援してきた経緯をここに振り返る。

キーワード：課外活動，学生支援プロジェクト，基盤的能力，コロナ禍

１．岐阜大学基盤的能力と課外活動の関わり

岐阜大学は，社会で生涯にわたって高度な専門職業人として活躍するために学生に身につけてほしい力として「基盤的能力」（「考える力」，「伝える力」，そして「進める力」）を掲げている。この力の修得を目指し，正課における授業の実施に並行して学生の多様な自主活動を支援することを通じて各個人の成長を促すことを目的に，正課・正課外を問わず様々な取り組みが全学的になされている。正課外での取り組みとしては，サークル活動をはじめボランティア活動といった学生の自主的な活動を大学として支援する体制作りがなされている。本稿が触れる「学生支援プロジェクト事業」というのは，岐阜大学教育推進・学生支援機構学生支援センターが執り行う事業の一つであり，そうした学生の自主的な課外活動を経済的に支援するものである。

２．学生支援プロジェクトの実施とコロナ禍

学生支援プロジェクトは毎年実施される，基盤的能力の修得を促すため，学生の発意によって提案・実施される魅力ある独創的な「社会貢献活動」と「研究活動」を経済的に支援

する事業である。その目的は「学部生又は大学院生（以下「学生」という。）が創造する学生のための自主的活動を支援することにより，学生生活の活性化に資するとともに，岐阜大学の学生として共通して身につけてほしい力，すなわち基盤的能力（「考える力」「伝える力」「進める力」）の育成を目指す」（公募要領）ものである。例年 3，4 グループのプロジェクトを採択し，上限 10 万円の支給をもって支援している。令和 2 年度までは学部生のみを対象としていたが，令和 3 年度は大学院生も対象に加えて実施することとした。支援の対象については公募要領に次のように記されている。

① 学生が提案し自ら実施するプロジェクトであること。
② プロジェクトの成果が他の学生の学びにも資することが期待されると同時に，次のいずれかに該当するものであること。
　（ア） 岐阜大学の学生を構成員とし事業の対象とするもの
　（イ） 「社会貢献活動」：岐阜大学キャンパスを事業（活動）の対象とし，社会貢献活動を通じて基盤的能力の育成が見込まれるもの（学部生対象）
　（ウ） 「研究活動」：研究活動を通じて基盤的能力の育成が見込まれるもの（大学院修士・博士課程対象）
　（エ） 岐阜大学の公益，共益に資するもの
③ 提案者自身の基盤的能力育成が図られるプロジェクトであること。
④ 支援対象分野は特に限定しない。
⑤ 応募資格は，本学に在学する学生 3 名以上で構成する団体とする。
　「社会貢献活動」は構成員の過半数を学部生，「研究活動」は過半数を大学院生で構成することで学部生と大学院生混合の団体を構成することができる。

例年 4 月終盤から 5 月上旬に学内募集を開始し 5 月に応募を締め切るようにしているが，令和 3 年度は令和 2 年度に引き続き新型コロナウィルスの感染が社会的に拡大し，その影響で課外活動も極力制限される状態が長く続いた。感染予防に最大限注意を払いながら，ようやく実施の運びとなったのは，6 月 1 日（火）になってからのことであった（締め切りは

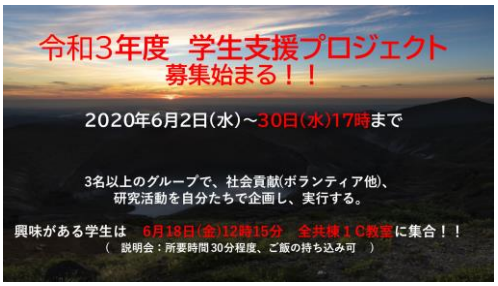

図 1．モニター画面での周知①

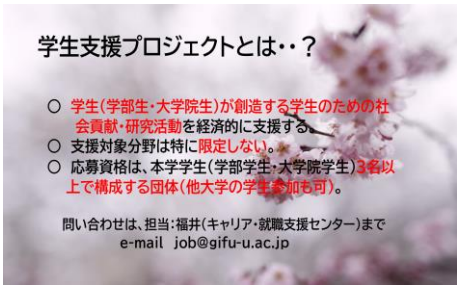

図 2．モニター画面での周知②

6 月 22 日（火)）。学内への周知は全学共通教育事務室と学生会館 1 階キャリアセンター前の電子モニター，そして AIMS-Gifu 上で実施した（図 1，2)。

応募を受け付けるにあたって令和 2 年度までと異なるのは，事前に説明会を設け，応募を検討する学生グループには説明会への参加を義務付けたことにあった。説明会は 6 月に 2 回（6 月 4 日（金）と 6 月 18 日（金）12 時から 13 時，全学共通教育棟 1C 教室）実施し，申請書の書き方と経費の執行方法について説明をした。

6 月 22 日の 17 時に受付を締め切り, 計 4 件の応募を申請書の送付をもって受け付けた。そして申請された各プロジェクトについて，令和 3 年 7 月 7 日（水）15 時 30 分から全学共通教育棟 1 階コモンズ 1A/1B 教室にて審査会をすることとなった。会では各グループにプレゼンテーション 10 分，審査員からの質疑応答 5 分の 15 分程度が充てられた。プレゼンテーションには，プロジェクトの内容他，具体的な活動日程，そして必要経費の細目が組み込まれ，以下の観点から各項目 5 点満点で評価された。〇魅力的であるか，〇独創性があるか，〇実施場所は大学内であるか，〇学生が自ら行うものであるか，〇岐阜大学の学生を対象としたものであるか，〇岐阜大学のキャンパス全体を対象としているか，〇岐阜大学の公益，共益に資するものであるか，〇提案者の「基盤的能力」育成が意識されているか，〇学生 3 名以上のグループであるか，〇事業の実施期間は年度内であるか，〇経費の執行期間は，令和 4 年 1 月末までであるか，〇キーワードに合致しているか（支援対象事業キーワード例示 :「キャンパスボランティア」,「広報」,「エコ」,「環境美化」,「マナー啓発」,「学修支援」など)。今回の学生支援プロジェクトは学生支援センター主催ということで，横田学生支援センター長他委員の先生方に審査員を依頼した。

審査会当日は問題なく進行が進み，どのグループも力のこもったプレゼンを披露してくれた。審査員からは多くの質問が寄せられ，発表者はその都度回答に応じた。予定時間内に審査会は終了し，結果は後日通知することとし，会は閉会となった。後日審査員からのコメントを付した形で，グループ代表者にメールにて結果を通知した。令和 3 年度は，応募があった以下 4 グループが採択された（1 グループは条件付き採択)。以下，各グループの活動目的と概要を申請書の内容から掲載しておく。

1. 手軽に！健康的に！～地元の食材を使ってレシピ紹介～

活動目的 : 下宿での料理に悩む人や実家でご飯を作る人たちに，手軽で健康的な料理のレシピや作り方を伝えるため。また地産地消の理解を深めるため。

活動概要 : 月に一度，レシピ本からメニューを選び，地元の食材を使って料理を作る様子やできた料理の動画と写真を撮影し，YouTube や SNS で主に岐大生に発信する。

2. 医療福祉界の課題に挑む！「のむゼミ」

活動目的 : 医療福祉業界における人手不足と世間の障がい者に対する偏見を学生の立場から解消すること。

活動概要：在宅療養中の障がい者との交流や，公的なイベントへの参加を通じて，障がい者の実際の生活を知り，学生の視野拡大・将来につながる経験の蓄積を目指す。また活動を通して得られた学びを学内外へ発信し，全国で活躍する学生ヘルパーのネットワークをつくり，学生が人手不足の一助となることを示すとともに，社会が抱く障がい者に対するイメージを変えていく。

3．キャンパスにおける学生と教職員の協働による自然再生の取り組み

活動目的：①鷭ヶ池（岐阜大学自然保存地）に対する学生や教職員の関心の向上
②生物多様性に関する取り組みに対する正しい理解と認識の普及

活動概要：植物標本作製ワークショップやかいぼり（池干し）における観察会を通して，学生や教職員が鷭ヶ池（岐阜大学自然保存地）をはじめとする岐阜大学柳戸キャンパスの自然環境に触れる機会を提供する。これらを通して，鷭ヶ池に関心を持つ学生-教員-職員のコミュニティを創出する。

4．減らそうフードロス．規格外野菜で健康生活！[1)]

活動目的：岐阜市内の野菜の食品ロスを削減するとともに，岐大生の地産地消の意識及び健康の増進を図る。

活動概要：岐阜市内の農家さんの規格外野菜を譲り頂き，大学内で学生に菜食主義用のメニューとして提供する。得た利益で情報を発信するなどして農家さんに還元する。

同月 27 日（火）に学生支援センターよりグループの代表学生宛てに採択通知が出され，以降各グループの活動が開始となった。

３．中間発表会の開催

始動したプロジェクトは，経費の執行についてはキャリア・就職支援センターに確認を取りながら進められた。約 4 か月が経過した 11 月 24 日（水）15 時半よりコモンズ 1A 教室にて中間発表会を開催した（図 3)。各グループの代表に再度集まってもらい，採択されて以降のグループの活動内容について 15 分のプレゼン（発表は 10 分，質疑応答は 5 分）を披露してもらった。新型コロナウィルスの感染が拡大する中，どのグループも感染予防に最大限注意を払いながらも確実にプロジェクトを進めており，会場からはいくつか質問の他，各グループに対して温かい声援が投げかけられた。

図 3．中間発表会の模様

４．最終発表会の開催

令和 3 年度の学生支援プロジェクト事業の最終発表会が令和 4 年 2 月 21 日（月），13 時半よりコモンズ 1A 教室で開催された。方法は中間発表会と同様とし，各グループで 10 分間の発表にくわえて質疑応答の時間を 5 分設定した。

図 4．最終発表会の模様

以下，発表順に最終発表会の模様を書き留める。

1. 手軽に！健康的に！～地元の食材を使ってレシピ紹介～（抜粋）

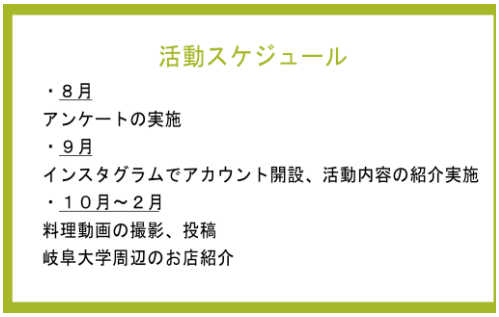

図 5. 発表スライド①

図 6. 発表スライド②

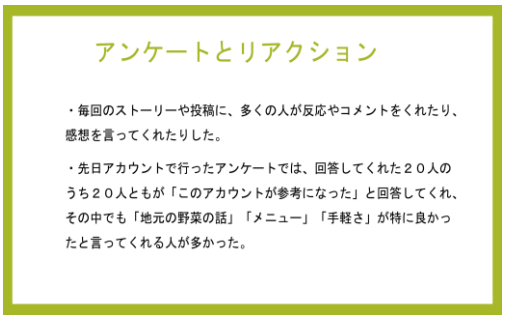

図 7. 発表スライド③

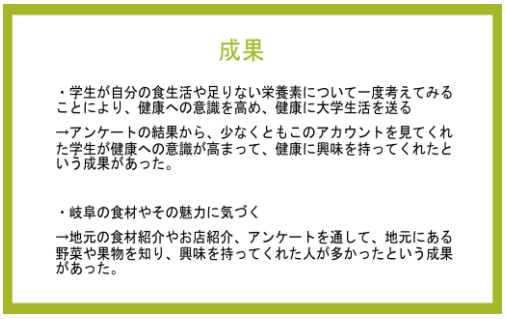

図 8. 発表スライド④

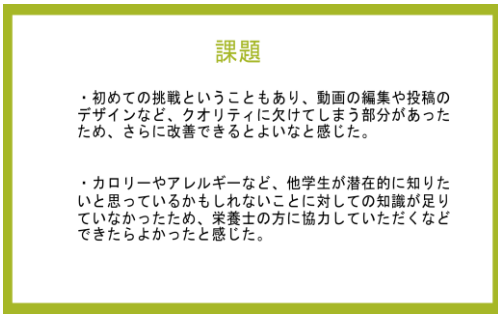

図 9. 発表スライド⑤

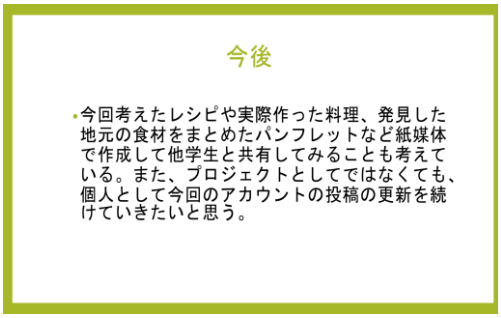

図 10. 発表スライド⑥

（活動成果の内容及び効果：事業成果報告書より）

インスタグラムアカウントを通して手軽にできて少しでも健康に過ごすためのレシピを紹介することができた。また，地元の食材を調べたり実際使ったりして良さを発信することができた。

アカウントに投稿していくことで，誰でも見たいときに，レシピや料理動画を見てもらえる効果がある。また，同じ大学生の目線で料理動画を撮影することで，気軽に見てもらったり作ってもらったりできる効果もある。

（委員からのコメント）

○　伝統的な料理への視点があると良かった。

○　食材選びの基準はどのようなものか。旬の食材を利用するという視点があると良かよかったなど。

2. 医療福祉界の課題に挑む！「のむゼミ」（抜粋）

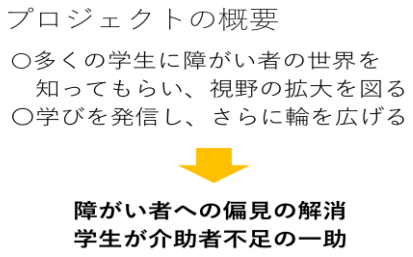

図 11.　発表スライド①

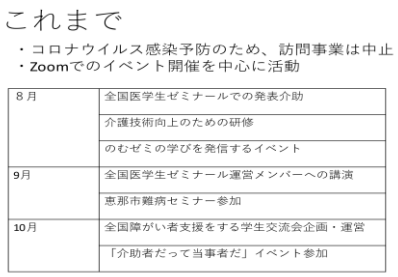

図 12.　発表スライド②

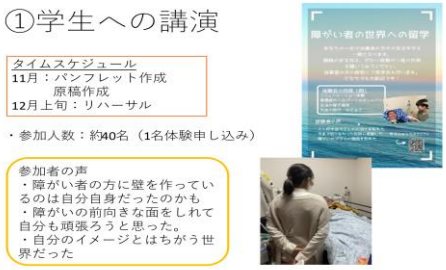

図 13.　発表スライド③

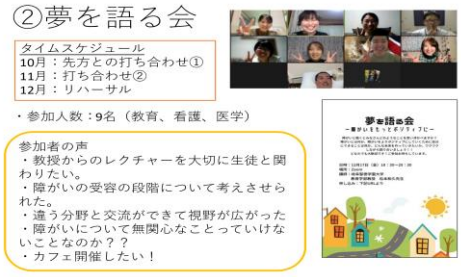

図 14.　発表スライド④

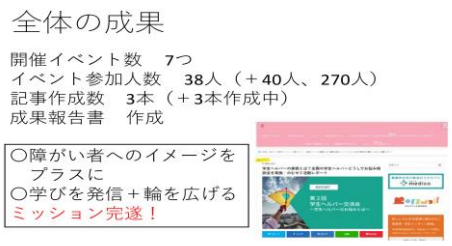

図 15.　発表スライド⑤

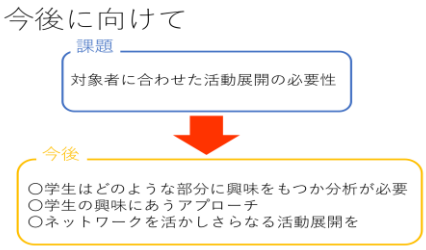

図 16.　発表スライド⑥

（活動成果の内容及び効果：事業成果報告書より抜粋）

・障がい者支援活動を啓発し，学生自身に自分にできることを考えてもらう事ができた。

・岐阜大学を中心に全国の学生に対し障がい者の世界を啓発し，繋がった学生と新たな活動を展開する事ができた。

・逐一，成果課題を振り返り，学生同士で現状打破のための建設的な対話ができた。

（委員からのコメント）

○　学生を対象としたアンケートの結果と活動によって障がい者への見方がどのように変わったのか教えてほしい。

○　人手不足の解消に向けてどのような影響が期待できるのか。

○　活動の目的と目標の違いを明確にすると良い。

3. キャンパスにおける学生と教職員の協働による自然再生の取り組み（抜粋）

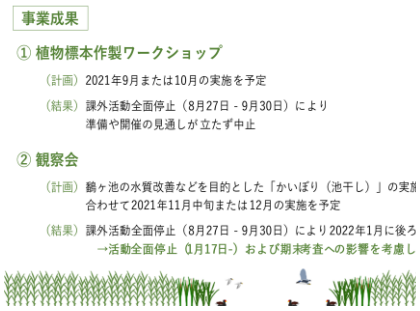

図 17.　発表スライド①

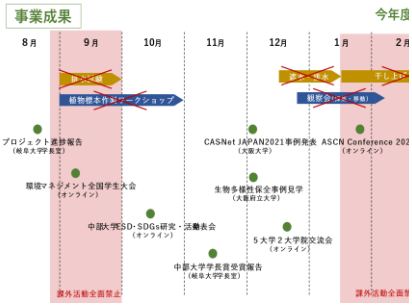

図 18.　発表スライド②

図 19.　発表スライド③

図 20.　発表スライド④

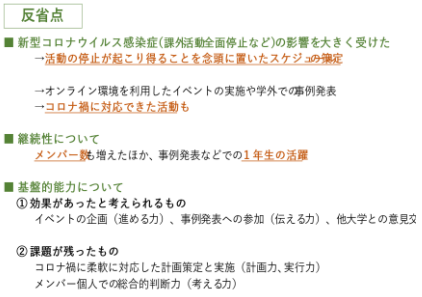

図 21．発表スライド⑤

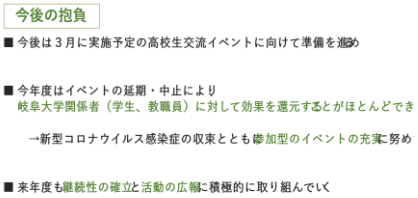

図 22．発表スライド⑥

（活動成果の内容及び効果：事業成果報告書より抜粋）

事例発表や新聞掲載[2)]を通して，大学および地域社会における生物多様性保全活動の参考事例（学生主体の環境活動のロールモデル）になったと考えている。特に ASCN2021 年次大会ではアジア 4 カ国（日本，中国，韓国，タイ）を含め国際的な活動の周知に繋がったと考えている。

（委員からのコメント）

○　学内の周知について，もっと工夫すると良いのではないか。

○　大学の構成員の中にも活動を知らない人は多い。

○　コロナ禍にありながらもメンバー募集ができているが，どのような方法で行ったのかなど。

４．おわりに

「令和 3 年度基盤的能力を育成する学生支援プロジェクト事業」は昨年度に引き続き新型コロナウィルスの感染拡大に大きな影響を受けた。課外活動がなかなか思うようにできない中で学内募集を令和 3 年 6 月に実施したが，想定以上に応募が少なかったのは，学生の間にも課外活動に対する戸惑いがあったのかもしれない。

例年通り厳正な審査を経て採択された 4 グループの企画はどれも非常に興味深いものだった。実際に活動したどのグループも岐阜大学が掲げる基盤的能力の獲得を念頭に，かつ新型コロナウィルスの感染予防に細心の注意を払いながら進めてくれたようだった。イベントの中止や対面での意思疎通が阻害される中で，自分たちが希望するようには活動ができなかったように思う。だが，こうした状況にありつつも，着実にプロジェクトを進めようとする姿が，中間発表会や最終発表会から十分に感じ取ることができ，非常に頼もしく思った。

今後の展開については，最終発表会にて本プロジェクト終了後も活動を続けるという，心強い応答があった。ぜひ継続して活動を行い，その成果を学内はもとより，学外にも発信し

ていってもらいたい。

【註】

1. 本グループについては条件付き採択となったのち，学業との関係で辞退の申し出があった。
2. 以下のように掲載された。
   ○「渡り鳥のバン 岐阜大に戻って　4 年中藤さんら 生息地保全に力　荒廃植物 種子から発芽　以前の水草帯取り戻す」（中日新聞 2021 年 12 月 15 日（水）岐阜県版 第 18 面）
   ○「渡り鳥バンを岐阜大にもう一度　学生らが生息地保全の試み」（中日新聞 2021 年 12 月 15 日（水））[https://www.chunichi.co.jp/article/383961]（2022 年 4 月 7 日閲覧確認）